

「現代形而上学概説」

第1回(20121004)

[シラバス]

古代ギリシアにおいて哲学の基礎は、第一哲学と呼ばれた「形而上学」(メタフィジックス)でした。しかし近代に登場した認識論や20世紀に登場した言語哲学のために「形而上学」は衰退していました。ところが、最近形而上学がふたたび脚光を浴びています。現代の形而上学の紹介をしながら、なぜ現代において形而上学が注目されるようになったのかを考えたいと思います。

以下のトピックについて概説します。

- 1.因果性:すべての出来事には原因があるのか
- 2.時間:時間は実在するのか、過去や未来は存在するのか
- 3.人格の同一性
- 5.意志の自由と決定論
- 6.心と脳
- 7.実在論 vs 反実在論
- 8.存在するとはどういうことか
- 9.形而上学とはなにか

---

10、私は存在するのか？私とは何か？（今年度の中心テーマ）

---

1、形而上学とは何か？

(1) 哲学とは何か？

通常よりもより深くより広く考えること

通常よりもより深い問いへの答え、根拠・原因・理由への問い

通常よりもより広い問いへの答え、より普遍的なものへの問い

①人生論:生きることの意味は何か？

道徳論:いかに生きるべきか？

②存在論:世界はどうなっているのか？

世界には何が存在するのか

存在するとは、どういうことか？

時間、因果性、必然性、可能性、とはどのようなものか？

③認識論:私たちは世界をどのように認識するのか？

④意味論:言語が意味を持つとはどういうことか？

絵画が意味を持つとはどういうことか？

(2) 伝統的な形而上学とは、存在論である。

注1:Aristoteles BC384-BC322

Metaphysica 『自然学的なものの後にくるもの』『自然学の後にくる書』

14 巻からなる書物(これは、最初からまとまった書物であったのではなく、後世の学者が、200年後くらいに論文を集めて、一書とし、それに Metaphysica と名付けたものである)

最近の形而上学の復活の理由は

- ①経験主義への批判、クワイン、デイヴィッドソン、ローティ
- ②心の哲学の登場

③認識論や言語哲学の停滞

④存在論と認識論と意味論は分離不可能である。

注1: Aristoteles BC384-BC322

Metaphysica 『自然学的なもの後にくるもの』『自然学の後にくる書』

14巻からなる書物(これは、最初からまとまった書物であったのではなく、後世の学者が、200年後くらいに論文を集めて、一書とし、それに Metaphysica と名付けたものである)

注2

孫正義新30年ビジョン

100年後のコンピュータチップのトランジスタの数(人間の脳のシナプスの数1ガイ倍(1兆×1億倍))

2030年のコンピュータチップのトランジスタの数(人間の脳のシナプスの100万倍)

2018年のコンピュータチップのトランジスタの数300億

人間の脳のシナプスの数300億個

チンパンジーの脳のシナプスの数 80億個

昆虫の神経のシナプスの数100万個

アメーバ1個

人類史上最大のパラダイムシフトが今後300年間でやってくる